松虫

観世流改訂謡本

別三

四番目

松虫（マツムシ）

九月　シテ 已者前ハ客人　ワキ 市人

ワキ詞へこれハ津の國阿倍野のあたりに住まひする者にて候。われこの阿倍野の市に出で酒を賣り候所に。いづくとも知らず若き男の數（アマ）多（タ）來り酒を飲み。歸るさには酒宴（ノ）をなして歸り候。何とやらん不審に候。今（キヨ）日（オ）も來りて候はゞ。いかなるものぞと

名をと尋ねぞやとなり

シテツレ次第上　四人　ヨワク

もとの秋をも松虫の。もとの秋をも松虫の。音にもや友をと忍ぶらん

シテサシ上

秋の風更けゆく

まつよ長月の。有明寒き朝風に。袖ふれ

四人

つゞく市人の。伴ひ出づる道のべの。草葉の露も深緑。立ちつれ行くやいろいろの蓑代衣日も出でゝ。阿倍の市路に出づ

るなり　遠里ながら程近き此や住の
江の浦傳ひ　潮風も。吹くや岸野の
秋の草。吹くや岸野の秋の草。松も響
きて沖つ浪。聞えて聲ぞ友きそふとの
市人の數々に。われも行き人も行く。阿倍
野の原ハ面白や。阿倍野の原ハ面白や
ワキカヽル上　傳へ聞く白楽天が酒功贊を作りし琴

詩酒の友。今ハ知られて市館に。樽をも並
盃を並べて。寄り来る人を待ち居たり。
いざ人ゞ酒めされよ　シテカヽル上　我が宿ハ菊賣
る市にあらねども。四方の門べに人さわ
ぐと。詠みしも古人の心なるべし。いざ人で
面々に。醴酒を酌みてもてなし給へ
ワキカヽル上　又彼の人の来れるぞや。げにいまハとつよう

酒を湛へ。遊楽遊舞の和歌を詠じ。人の心を慰め給へ。早く家に帰り給ひそよ

シテ「何われを早くな帰りそとよ

ワキ「なかく

の事暮れ過ぐるとも。月をも見捨て給ふなよ

シテ「御せまでもなし何とてこの酒友をば見捨つべき。古き詠にも花のもとに

ワキカヽル上「帰らん事を忘るゝは

シテ「美景

に因て作りたり　樽の前に醉を勸めてハ。これ春の風とも云へり　今ハ秋の風暖め酒の身を知れバ。薬と菊の花のもとに。帰らん事をも忘れいざや酒を愛せん・たとひ暮るとも。たとひ暮るとも。夜遊の友に馴衣の。袂に受けたる月影の。移ろふ花の顔ばせの。盃に

向へぞ色も猶まさりぐさ。千年の秋
とも限らじや。松虫の音も盡きじ。と
までぐさのいつまでも。變らぬ友とそふ
買ひ得たる市の。寶かな買ひ得たる
市の寶かな。いかに申候。唯今の詞の
末に。松虫の音に友をしのぶと承り候。
いかなる謂にて候ぞ　さん候それについ

て物語の由語つて聞せ申すべし　ワキ「さら

ば御物語り候へ　シテ物語「昔此阿倍野の

松原を。ある人二人連れて通りしに。折り

ふし松虫の声面白く聞えしかば。

一人の友人。彼の虫の音を慕ひ行きしに。

今一人の友人。やゝ久しく待てども帰ら

ざりし程に。心もとなく思ひ尋ね行き

見れば。かのもの草露に臥して空しく
なる。死骸ぞ一所とこそ思ひしに。こはそ
も何といひたる事ぞとて。泣き悲しめど、
かひぞなき。其まゝ土中に埋木の。
人知れぬとこそ思ひしに。朽ちもせで
松虫の。音に友をしのぶ名の世にもれ
けるぞ悲しき　今も其。友をしのぶの

びて松虫の。友を志のびて松虫の。音に
誘はれて市人の。身を変へてなき跡の。
亡霊とこそ来りたり。恥かしやこれまで
なり。立ちまがりなる市人の。影に隠
れて阿倍野のかたに帰りけり阿倍
野のかたに帰りけり不思議や
さては此世にも。亡き影をてとし残し

つ。此ほどの友人の。名殘を暫しとゞめ
給へとても秋の暮。松虫も鳴く
ものをわれをや待つ聲ならん　そも
心なき虫の音の。われをと待つ聲ぞとは
眞しからぬ調かな　虫の音も。虫の
音も。志のぶ友をぞ待てかとこそ言の葉
まもかるらめ　げによく思ひ出したり。

古き歌にも秋の野に人松虫の聲すなり我かと行きていざ弔はんと思しめすらん人々。ありがたやこれぞ真の友なれや。志のぶぞよ松虫の音に。伴ひて帰りけり虫の音につれて帰りけり

待謡
ワキ上歌

松風寒き此原の。松風寒き此原の。草の假寝のとこをそよ法をなして

使もそがら。彼の跡とふぞありがたき

彼の跡とふぞありがたき　一声　あらあり

がたの御弔ひやな。秋霜によわる虫の音

聞けば。閻浮の秋に帰る心。猶郊原に

朽ち残る。魄霊これまで来りたり。嬉

しく弔ひ給ふものかな　「はや夕陰

も深緑。草の花色露深き。其方を

見れぞ人影の。幽に見ゆるハありつる
人か　あらうれしやもとよりの。昔
の友を猶しのぶ。虫の音ともに顕れて。
手向を受くる草衣の　浦ハ難波の
里も近き　阿倍の市人馴れ馴れて
とむらふ人も　訪ぬるわれも　いよ
しく今とそ　変れども　古里に。住

みしハ同じ難波ぐ。住みしハ同じ難
波ぐ。葦火焚く屋も市屋形も。変
らぬ契を志のぶぐさの忘れえぬ友ぞ
かしあら。なつかしの心や　忘れて年
を経しものを。また古人よ帰る旅の。
難波のことのよしあしもげよ蘆なき
友とうや　見よ落花を踏んで

相伴ふて出づ。夕べに飛鳥に從ふて一時に帰る　然れども花鳥遊楽の寝覚。風月の友に誘はれて。春の山べや秋の野の草葉にすだく虫までも。聞けば心の友ならずや・一樹の陰の宿りも他生の縁と聞くものを。一河の流汲みて知る其心浅からめや。

奥山の深谷の下の菊の水。汲めども
汲めどもよも尽きじ。流れの盃ハ手先
づ遮れる心あり。されば廬山の古へ虎渓
を去らぬ室の戸の。其戒を破りしも。
志を浅からぬ。思の露の玉水のけい
せきをこえし道とかや。それハ賢き
古への。世もなさけ心さそて。道ある友人

●独吟一調
五曲之内

のかぎてく積善の餘慶家に普
く廣き道こそや。今は濁世の人間に
とまよ拙きわれらまで。心もうつろふや
菊なとなく竹葉の。世は皆醉へりさらば
われひとり醒めもせで。満目みな紅葉
せり。唯松虫の獨音よ。友を待ち詠
となして。舞ひかなでて遊ぜん●盃の。

●杜舞

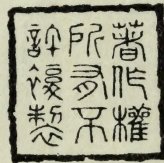
雪を廻らす花の袖で 黄鐘早舞● おもし
ろや。千草まてだく虫の音の機
織る音のきりはたりちよう きり
はたりちよう。つゞり刺せてふ蟋蟀蜩。
いろくの色音のおなかに。わきて我が忍
ぶ。松虫の聲。りんりんりんとして。
夜の聲冥々たり さりや難波の

鐘も明方の。あきまよもおりぬべし。きらびよ友人おどりの袖と招く尾花のほのかよ見えし。跡絶えて草茫々たるあしたの原よ。草茫々たるあしたの原よ。虫の音ぎおりや。残るらん虫の音ぎおりや残るらん。

大正六年五月廿五日印刷
大正六年五月三十日發行

訂正者　丸岡桂

發行者　東京市神田區今川小路三丁目九番地　土居源太郎

印刷者　東京市神田區佐久間町二丁目一番地　七條愷

印刷所　東京市神田區佐久間町二丁目一番地　七條式金屬版印刷所

發行所　東京市神田區今川小路三丁目九番地　觀世流改訂本刊行會
電話本局三六〇九番
振替東京一三四七五番